

IV 特別寄稿

人間・信頼性・そして環境を創る

法政大学大学院教授 渡部 與四郎

私は昭和55年5月、建設省都市局技術参事官から文部省に出向、筑波大学社会工学系教授となり、環境科学研究科では国土計画論等を講義し、就職委員長を経験した者である。60年11月法政大学に大学院博士課程新設に必要な計画コース教授として要請をうけ、筑波大学を辞したわけであるが、5年半という年月、筑波で計画者として悩み、考えたこと等を随想的に綴ってみようとする。

また、現在、社団法人日本都市計画学会会長を務めているが、その面からの希望も述べてみたい。しかし、若干、練言になることをお許し願いたい。

〈私と国土計画論、そして環境科学〉

私は建設省、経済企画庁において、国土計画、地域計画、都市計画に関する行政に携って来た。そして、毎年、来年度の予算要求をし、それを執行するとか、10年、20年先の計画を考え、これを決定事項にするための調整、手続き上の難しさを体験して来た。

その時、上手にやること、その場のがれの言辞を弄することより、相手の立場になり、そして国民の立場で攻究することが大切であることが判った。また、わが国の地域政策の功罪を歴史的に調べ、その流を「天の声」として捉え、その地域のおかれる種々なる条件、とくに、地域の人々の意欲のたかまりが、何か新しいものを生み出すことの意義を知らしめることのメリットも判って来た。

筑波大学の環境科学研究科の方々と環境を論ずるのは少なかったが、大学は「自分の専門分野だけから分析している環境課題であり、その複雑性、その輪廻性を明確化し、そのこんがらがりを整える主軸の糸をたぐることの努力が少い」様に感じられた。

従って、私は環境科学が本来志向する総合性—自然、居住、生産各環境のバランスあるもの—という目標体系の壮大な全貌を知り、その一片一片を貪欲に喰い、反芻し、消化する、と云った繰返しが長期間の結晶となって、世の中に評価される事が大事であるとの考えを持っている。この面からみると、味に好き嫌いのある人が、自分の好きなものだけを食べて、その味から食物全体を論ずるのは、いわゆる「群盲の徒」と謗られる恐れがある。

もちろん、自分の天分に合った専門を軸として考察し、それから領域を抜けてゆくことは無難であることは判っている。しかし、この様な努力では、環境に対する一般の人々の各種期待と不安を解消させることはできないのは、私は「田子の浦公害」事件でいやと云う程体験して来た。

これから、人類が爆発的に増加し、食料、エネルギー等で多くの困難な課題に直面することが予想されている。その際、我が国が第二次世界大戦後、貴重な体験をして学んだ、資源開発、利用高

度化、社会開発等の国土計画上の計画方式は必ずや役立つに違いないと考える。この方式のうち、地球社会がどのような選択をし、歴史的にどう評価をうけるかは学者的には興味あることではあるが、我が国の立場からこの選択について教示する義務もあると考える。

それにしても、その義務行為の一步とも、一石ともなる「環境科学読本シリーズ」(朝倉書店)の出版計画はどう進捗しているのであろうか。私は期限までに真面目に書き、提出したわけであるが……。出来た書物の質が優秀でなくとも、これを読んでくれた人が、一人でも多く、「環境は守る」よりも「環境を創る」という気持ちになって、21世紀を迎えて貰いたいと希望する。

以上の様な感懐で国土計画を包括的に論じたわけであるが、現在も日本都市計画学会にアメニティ委員会を設け、車社会と環境との併立処方箋をつくろうとしている次第である。

〈すぐれた環境は人間によって創られる〉

すぐれた環境がもつべき本質的な基盤は、第1に、未来に向かって生き続ける成長しうる地域力を有すること、第2に、都市醜等を排除しうる清潔な地域であること、第3に、地域住民が生甲斐をもって人間性を発揮し、子孫に誇りうる美しい所産を創りうること等にわたる「利・健・美」を満足させる3分野を整合性をもって創ることに係っている。

筑波大学は筑波研究学園都市にあって、その熟成への先達になることが期待されている。換言すれば、当該都市は筑波大学の環境科学の実験場とも云えよう。しかし、この実験場をアメニティの観点から、外国・日本の他の都市と比較、評価すると、次の様な弱点が在筑の研究者のアンケートから判る。即ち、「生活する上での便利さ」の点から、バス、鉄道等の利用が全く不便なこと、「生活上の快適さ」の面から、飲み水が苦く、水質が汚染された水辺しかないこと、「まちの景観、雰囲気」の角度からは、街なかを流れる川がなく、歴史的な建造物が少いこと等が指摘されている。

これらに共通して云えることは、新しい都市であることに帰する。しかし、この都市のわが国なり、首都圏なりの重要な役割から、一日も早く「核都市」として熟成が待たれるのである。通常の都市であれば、3世代にわたっての営みの連続で、ようやく都市らしい味が生れると云われる。しかし、100年という年月を無為に過すことはできないし、今回の首都圏基本計画でも業務核都市として、土浦市等を含む広域都市が認知されようとしている重要な時期を迎えている。

従って、本地域に係る特別法を改善し、ママタープランを法定にすると共に、その熟成への主役づくりを明確にする段階が来ている。私も、科学万博を通じて、新しい交通システムのための高架街路、科学博物館につながるシティ会場、救急救命病院、そしてテクノ団地づくりに、教学の傍ら参与した一人である。また、この間、建築研究所々長の竹林氏と筑波情報交換会を主宰した経験を有するが、結局、人間同士の信頼感が湧き上がる環境づくりが大事であることを痛感した次第である。

筑波大学は「開かれた大学」を崇高な目標としている。しかし、この開かれたという意味は過去形ではなく、未来に向かって、さらに開かるべきという意味合いもあることは当然である。このためには、環境科学研究科に関係する者は、その岩戸をより広く開く運命を担っていると云えよう。そ

の一環として、新しい整序セクターをつくり、これを主体としては如何であろうか。

この整序セクターは、従来の第3セクターという共同体の上に、地域住民という新・旧住民が、職域を超え、信頼と努力の下で結集する組織である。この中核となるものは環境科学研究科であり、これらの実践が新しい、魅力ある環境づくりに直結し、環境科学の何たるかを実学の中で知らしめることができよう。